

辰巳会幹事一覽表 (○印は支部長)

会長 高畑 誠一	今村 冬二郎	今村 頼吉	小野 三郎
本部幹事	大幡 久一	小倉 五郎	嗟峨崎 亨
	中村 勇吉	畑 薫	橋本知一郎
	福田 秀吉	松岡 俊一	松下 重男
	柳田 義一	米田 幸吉	
東京支部幹事	○西川 政一	安東 浄	加藤 福雄
	石田 俊一	煙石 隼人	楠本 直美
	小島 実	齊藤 庸吉	坂本 寿
	鈴木 丸衛	田代 義雄	山成 卓爾
中部支部幹事	○秋元 鷹男	竹下富士松	西川 一蔵
	伏見 俊助	小松 豊秀	小栗 正
四国支部幹事	○竹崎 浅吉		
	上久保秀樹		
九州支部幹事	○松本 通	永岡 恵	西 茂
	松本 得一	米倉 勇	
北海道支部幹事	○町田 叡光	小川謙二郎	桜庭亥一郎
	深谷 良一	加地彦太郎	山口 義雄
		牧野 豊三	

楠瀬正一さんと私

中村勇吉

去る八月に楠瀬正明氏が鈴木薄荷株式会社第四社長に就任された。御芽出度う。

同氏の御親父の故楠瀬正一氏が、昭和二年六月鈴木薄荷解散直後、鈴木薄荷有限公司が創立され、第一次社長として鈴木薄荷店発祥以来の「厚印薄荷脳薄荷油」の製造販売事業を継続運営に就任された。

其の正一氏と私の縁は私が大正六年鈴木薄荷店入社以来より結ばれ、御逝去までの五十有年余間、公私共其主として同製品取引事業に關連して変化の甚だ多かつた道を手をつなぎ乍ら共に過ぎて来た深い思出を書かして戴きます。

正一氏は故金子直吉氏の直弟子の御一人として御活躍され当時重要取り扱いであった「厚印薄荷脳薄荷油」等の他を主として取引されて居られ

た。私が大正六年に鈴木薄荷店に入社、大正七年にシヤトル支店に転勤拝命の際、正一氏より前記諸商品他を何とか米國消費者に直売の努力をとの御要望を受けたが太平洋岸には消費者存在せず残念乍ら期待に反したが、幸せな事に大正十年に同商品市場の世界中心地の紐育支店へ転勤したので正一氏の御期待に添う機会が出来た。

當時は北浜留松氏が支店長で柏万次郎氏も居られた。転勤當時は総ての商品取引上最高位の競争相手の三井物産が既に同種商品を仲介人を通しては勿論高級消費者へ直売の地盤が既に築かれ、亦築かれつつある状態に在ったが、正一氏の熱望を聊かにも実現をと東奔西走の結果仲介人を通じては勿論消費者直売にも効果を現して来た。

旭印樟腦はEASTMAN KODAKへ直売、今では想像も出来ぬが當時は写真のフィルム製造に多量の受注があった。「厚印」の薄荷脳油は、MC-KESSON & ROBBINS に MENTHOLATAM、VICKS CHEMICAL 等大消費者への直売に漸く他社を圧する事が出来て来たので嬉しかった。是れ全く生産地に於ける正一氏の絶

昭和53年元旦

謹賀新年



株式会社神戸製鋼所

相談役 外島 健吉
会長 杉 沢 英男
社長 高 橋 孝吉

帝人株式会社

社長 大屋 晋三

日商岩井株式会社

相談役 西川 政一
会長 辻 良雄
社長 植田 三男

太陽鋳工株式会社

会長 高畑 誠一
社長 鈴木 治雄

大なる裏の努力が多であつて知らぬ間に競争相手を追い越し其の有様を見て喜び乍ら販売努力を続けて居た。突如勃発した最大の不幸、会社の解散に依つて二人の間は跡絶えた。其の直後私が米國有数の製薬会社で最大得意であつた MCKESSON の社長 COSTER 氏に拾われ東洋の支配人と成り神戸市の商船ビルに事務所を開設、當時の我國の重要輸出品の売込みが始まつた。此の事務所開設に依り一時紐育で切れた正一氏との關連が亦期せずして甦つた。それは鈴木薄荷店解散直後、金子氏の御指示の下、資本金十萬円で昭和二年に鈴木薄荷有限公司を設立、磯上通四丁目目の元の薄荷工場を運用して正一氏が第一次社長に就任、昭和八年に五十萬圓に増資、株式会社に組織変更、二十二年に百萬圓に、二十五年に三百萬圓に、二十九年に千萬圓と次々と事業發展せられた。其の間私は買手として直接間接に正一氏と密接に取引關係を継続した。當時「厚印」鈴木薄荷脳油は品質最優良で永年の歴史を有して居る為め國內は勿論世界各国の消費地に於て其の点を認められ同品の代名詞として「SKYNT」(スキント)と唱え鈴木を第一位に、続いて小林、矢沢、長岡、東洋、の順位であつた、斯く首位として認められて居たのは正一氏の絶大なる努力の賜物と信じる。昭和十四年残念ながら日米戦争勃発、其の直前 COSTER 社長からの指示に依り今迄の輸出実績を全部君に譲渡する故平和に成る迄遺憾乍ら事務所を閉鎖する様にと命を受けた。勿論予想して居る通り間も無く日米戦争が勃発した。直に譲り受けた輸出実績を元に中村勇吉商店(株)を開設輸出事業を始めた。

其の秋に突如正一氏より「金子氏の指令であるが君の会社の輸出実績を持って当社に帰社しては如何」と受けた。熟考して受諾する事にした。當時の事務所は栄町三丁目北側の一階の鈴木薄荷(株)の事務所で正一氏の下、専務取締役として机を並べた。斯くして同氏と私の直接の三度目の御縁が甦つた。其の後事務所を明海ビル五階に移転した。二十年三月残念乍ら戦災に遇い磯上通の工場は全焼した。ところが前記事務所は四階と六階は全半焼したが神の守りか入口の戸のガラスが今

一步で焼け落ちる寸前位の被害で済み重要書類其他は全部無被害であつて海外得意先と不自由無く交渉が出来た。

早速西青木所在の古い木造住宅跡を入手して事務所を移し小規模の工場に造り変え一旦消え去つた厩印の再建が始まった。当時正一氏宅も私の宅も被爆で正一氏は暫く此の工場の二階で御家内一同住まわれた。

二十二年十一月、高畑氏の御好意に依り現在の下河原通り一丁目目工場を移転、事業は確実に発展、従前の状態にもどつて来た。

三十五年二月には此の業会のリーダーとして東奔西走活躍されて居た正一氏が前日まで元氣であつたのに

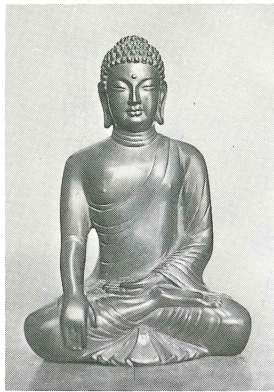
◆如来座像

金銅造り

韓国仏師 金一東師の作

縦一七センチ 作者は今春九十九歳を数える云々。

この仏像は昨年八月神戸市法徳寺劉日海師が韓国より招来されたるもの、誠に格調の高い優美な容姿は説明の限りではない。(編)



何の因か突如他界された、涙々で何の言葉もなかった。

直に高畑氏の指令により私が二代目の社長の重席を受けた。十余年後其の席を第三代目の小松彰男氏にゆずり此度正明氏が四代目に就任されたことはまことに欣懐の至りである。前記の様に初代正一氏と私とのつながりを思い浮かべる時、約五十年間公私共に厩印の元に共に努力した事を思う時、氏の人柄、友情等々思い出はつきぬ。また正一氏と共に御得意先や関係会社の方々の接待を氏の大好きな京都を中心として色々な場所を楽しんだ無数の思い出がある。

神戸では花隈のお茶屋町、京都では祇園先斗町中心に楽しみ南座の顔見世見物は毎年かかすことはなかった。未だに印象は新しい。

私は辰巳会で常に飾られて居るのれんの厩印を見る度にそのレットルを身につけて世界各国に薄荷脳、薄荷油が活躍走り廻つて居る有様を目にしたが五十年の間共に楽しんだ事絶対に忘れはしない。

正一氏の冥福を心より祈り、どうか正明氏、この御親父のあとをつがれ一層壮健で御活躍を心より希望し私の思い出を終わらせて頂きます。

(元鈴木薄荷株式会社社長)

◆嶋内義明著

「南岬の賦」に就いて

一昨年急逝された嶋内義治さんのことども在りし世を偲んでいた矢先「南岬の賦」なる令夫人桃枝さんの麗筆装禎に依る見事な書が手許に届いた。行き届いた追憶の数々の御芳作に感激致しました。早速静かに御冥福を祈りながら拝読の湿るのを覚えましたので、茲にその序の一節を掲げ亡き嶋内さんに感謝の意を表します。

序

嶋内義治は、さる昭和五十年十月二十六日の夕方、突然この世を去りました。義治の生きた時代は、ほとんど戦中、戦後の激しく暗い時代でした。しかし、生来の楽天的な性格と陽気さで、義治はさまざまの苦難をのり越え、まるで苦勞などなかったかのように、満ち足り、安らいだ表情で、あの世に旅立って行きました。

家族には心配をかけまいと、会社のこと、自分の身体の具合などはほとんど語りぬ人でしたが、けつして調子の良い時ばかりではなく、それ

どころか、戦時中は増産に、戦後は資金難に追われ、ようやく会社が軌道にのつた頃には、結核や腰痛、狭心症に悩まされ、心身に爆弾を背負い続けた一生でした。

しかし、そんな驍をみじんも見せず、苦もなく七十年間を生き抜いたように見せたのは、天性のバイタリティと、南国生れの明るさによるものだったといえるでしょう。

晩年には自ら「南岬」と号したように、あの暗い時代にも義治をささえたのは、生れ故郷の、輝くような陽光に育まれた天賦の明るさでした。どんな時にも愚痴一つこぼさず、むしろ唄うがごとく送つた義治の一生は、誠に幸せなものだったといえるでしょう。

「人の価値は棺をおおうて定まる」とかいいますが、義治の没後、いろいろな方から寄せられたご厚意は、正直のところ、私達家族の予想をはるかに越えたものでした。

会社は既に無く、一介の素浪人ではない義治の死に、実に沢山の方から弔意をお寄せ頂き、私達はただただ感涙にむせぶと共に、改めて故人の人柄をしのんだことでした。義治は学識が深かったわけでもなく、大きな事業をなしたわけでも

もありません。それがこうして沢山の方々にその死を悼まれたというのも、ただ「人の為」と、ひたすら誠実に生きた生きざまが愛されたのでしよう。

「嶋内さんが書かれたものをまとめて本にしたい」と、生前親しくして頂いた方々がおっしゃって下さいました。

有難いことです。

しかし、私達家族も、胸に残っている面影だけでなく、何か形のあるものを想い出に残したいと考えていましたので、折角のお申し出ですが、ご厚意だけをお受けし、自分たちの手で、義治の生涯を静かに繰りなが

埴輪 水鳥

(正木美術館蔵)

古墳時代(AD3C~5C)

総長一九センチ 総高一七・七センチ

水鳥を写実的に良くとらえて居り、背の羽根の部分に数条の陰刻線が簡潔、素朴に現している。



ら、この書を編むことにしました。故人は特に文筆家でもなく、人に読んでいただける程のものを書き残したわけではありません。ただ持ち前の筆マメから、折にふれいろいろのことを書き綴っていました。

あきれ程の記録魔で、昔、「石炭羽幌」などの社内誌に載せた原稿から結婚式のスピーチにいたるまで、部厚い日記帳に全部記してありました。

晩年には寺社めぐりに凝り、辰巳会の機関誌「たつみ」に「東都古刹めぐり」の記事を載せさせて頂いていました。

こうした原稿の中から幾つかを選び、ここにまとめてみました。羽幌炭鉱が草深い山里に還つてしまつた今、創業当時のヤマの姿は一部の人の記憶に残るだけとなつてしまいましたが、義治の書き残したものが、今後、多少の資料や記録になるのではないかと思ひ、あえて短いものでも収めました。

また、故人の人柄をしのぶ意味で、葬儀の際頂きましたご弔辞、そして生前親交のあつた方々から寄せられた原稿を収録させて頂きました。

ご弔辞を頂いた大幡久一様、町田叔光様、斎藤庸吉様はじめ、ご多忙

の中、時間をさいて故人の想い出を書いて下さいました山口義雄、高橋武夫、長谷川寿雄、松下康郎、大阿久忠雄、今村守、古川和美、久塚磨の皆様に厚くお礼を申し上げます。ここに掲載させて頂いたもの以外にも、「自分も原稿を……」とおっしゃって下さる方も多く、また故人との交際が深く、いろいろな面を知つておられる方も多いのですが、何分、

随想

天眠先生思い出話 松井竹代

東京辰巳会秋の例会の案内状を十月八日受け取つた。歯切れのよい名文時局を織り交えただけに興味を覚え大声で読ませて貰つた。

「秋もいよいよ深く爽やかな昨今ですが不況も未だ好転せず南の空には不屈なハイジャック、漁業水域は狭ばめられて罰金は取られ放題、為替は円高だが鉄鋼や自動車は安すぎる」と各国から文句、砂糖は港に山積みになつている。国内に於いては変な住民パワーで、エネルギーも必要な空港も、新幹線の延長も更に大事な国防も宙に浮いた感じである。政府も与党も全くユル禪、野党は四離滅裂と云うときに当り秋の例会を

ページ数に限りがあり、原稿をお願いできなかったのは誠に残念です。これまでに寄せられた皆様のご厚情に深く感謝の意をささげます。最後に、この本の出版にあたり、何から何までお世話になつた島内淳様に厚くお礼申し上げます。昭和五十二年十月二十三日

嶋内 義明

嶋内 桃枝

催します云々」早速家庭の者と相談して当日の出席の返事を発送した。話は昔々金子様の命令で私一家は小樽へ転動しました。その頃の船は港は繁昌、内外の船舶の出入りが目ざましいものでした。わが海軍聯合艦隊の入港した当時は、海陸賑々しく壯観そのものだった。中学一年生であった長男達は学校から生徒一同と軍艦見学に出掛けられたものの夕方波浪高く艦内に一夜を明かした。翌朝港までお母さん達が迎えに出た。その途中町を歩いてきた五人の水兵さんを長男がわが家に案内して来た。そして一番に欲しいものを尋ねると一人は大の字に寝転び度いと、又一